日比野学長×早野理事長トークイベント

2024 年 12 月 3 日、東京藝術大学で開催された「芸術未来研究場展」で同大学の日比野克彦学長と東京マラソン財団の早野忠昭理事長によるトークイベント『ドローイングランナートーク／街を走る』が実施されました。2023 年の初対談ではスポーツとアートのコラボレーションが生まれましたが、今回はさらに発展して「ART × SPORTS」による新たな価値の創造、未来などを語りました。

――はじめに、2 度目となる今回の対談が実現した経緯、芸術未来研究場展で行う意義、狙いについてお話いただければと思います。

日比野学長　よろしくお願いします。芸術未来研究場の「場」は運動場の「場」でもあります。色々なアートを展開できる「場」を大学のキャンパスや美術館といった建物の空間の中だけではなく、面的に「場」を広げていきたい。そして東京藝大が様々なステークホルダーと関わることでアートの意義を広げることによって、アートの力が今ある社会的な課題に対して次なるフェーズへ進めるきっかけになり得るだろうなということで、この芸術未来研究場を始めました。それで早野さんとスポーツとの対談をしましょうとお話をいただく中で、じゃあ、この芸術未来研究場展でやりましょうと。なおかつ前回の東京マラソンの中で「ドローイングランナー展」を展開していただいたので、またそれを早野さんとのお話の中で発展的にしていきたいなと思っています。

早野理事長　東京マラソン 2024 公式プログラムでの対談が最初のきっかけで、具体的なアイデアとして大会当日に学生さんにランナーの走る姿をクロッキーで描いていただきました。ランナーが速くて描ききれなくて「描くこと自体がスポーツですね」という話のオチもありましたが（笑)、これは日比野学長と我々との関わり、あるいは芸術とスポーツの世界との関わりのファーストステップだと思っていまして、これからどんどん深めていきたいです。それで実は昨日、私は長崎県に行っていまして、ミュージックマラソンというものの話を色々としてきました。極端な話、
ミュージックやアート、スポーツがなくても生きていけるし、生活必需品ではない。だけれど、これらは人間が楽しく幸せに暮らしていくために必要になってくるものだと思います。やっぱり皆さんが幸せに感じる社会というものはただ生きているだけではなくて、付加価値があってこそ。アート、スポーツ、音楽もしかり、そうした世の中で私たちが手を結び、一緒にやっていく意義があるのかなと思っています。

――今、お話の中で出てきた「ドローイングランナー展」は前回の東京マラソン 2024 公式プ

ログラムでのお二人の対談をきっかけにアートとスポーツのコラボレーションの考えが生まれ、実現した企画です。大会当日に東京藝大の学生たちがクロッキーという素早く描画する手法で、スタート地点から走り出すランナーの姿、躍動感をそれぞれの感性でとらえて描き上げました。この「ドローイングランナー展」の反響、率直な感想などを日比野学長にお伺いできればと思います。

日比野学長　昨年の対談の中で僕の方から提案させていただきました。走っているランナーをドローイング、スケッチすることによって、アートとスポーツを分かりやすく発信できるのではないかと思ったんです。一番の魅力は走っていく姿に対しての躍動感、人間の体の動き、熱量、その日の空気感が刺激になって手が動き、ドローイングになること。そのまま止まっているものを描くのではなく、躍動感や動きというものに反応して自分もアスリートの一部となり、その動きの軌跡がドローイングになっていくので、決して走っている姿その通りに描こうなんて思っていないんですよね。

アスリートとアーチストはすごく似ているなと僕は思っていて、イメージを形にして42.195km を走る――例えば、サッカー選手も 11 人のフォーメーションや、相手の動きをイメージして、それをボールに伝えてゲームになっていく。それと同じように、イメージを自分の筆に伝えて動いた軌跡がドローイング。イメージを運動神経からボールに伝えるか、自分の身体に伝えて走るか、絵筆にするか、最終的に違うだけであって、イメージを運動するというところではみんな同じなんですね。だから、ドローイングしている学生もランナーだと言ってもいいくらいのイメージで「ドローイングランナー展」を展開したつもりです。学生たちにとってもこの経験はすごく重要だなと思っています。

早野理事長　マラソン自体もよく 42.195km のドラマだと例えられますが、それには前後のストーリーもあり、我々は「SHOW YOUR STORY.」というキャッチコピーで表現して、38000 人のそれぞれの想いを表現してくださいとランナーの皆さんに伝えています。その意味ではランナーもアーチストなのだと思います。ですから、東京マラソンはスポーツという側面だけではなく、文化としての側面も含めた総体として我々は捉えており、身体運動という意味だけでのマラソン大会ではないと思っているんです。

それを際立たせるためにアートやミュージックとの結びがあるわけですが、やっぱり人としてどういうふうに生きていきたいか、表現していきたいか。東京マラソンは自己主張であり自己承認の場でもあるわけですね。アートもそうだと思いますが、特にマラソン大会は極限まで追い込んだ中で成し遂げるという浪花節的なところもあります。そういったドラマであったり、日比野先生がおっしゃったことと重なる部分があったり、文化であったりと、これらは東京マラソンにおける表現の大切な部分なんだなと、今のお話を聞いてあらため

て確認しました。

――アート、スポーツは社会との様々な関わりの中で存在しているということがお二人のお話の中でうかがえました。では、様々な社会課題がある中で、解決に向けてアート、スポーツが及ぼせる影響、可能性についてはどのように考えていますか？

日比野学長　人間は「表現」したいものなんですよ。その表現する行為が自分の仕事、経済収入につながるのが一番理想的だと思いますし、表現者というものは別にアーチストだけではなくて、例えばセールスマンもそう。自分の商品に対する表現が相手の心を動かして、セールスできたということも「表現」だと思うんです。ですから、色々な仕事は全て「表現」だと考えていくと、みんながアーチストですし、それの一番源流的なものにアートとスポーツがあると思っています。学校の教科には国語、算数、理科、社会のほか、体育、音楽、図工がありますよね。その中で体育、音楽、図工は幼稚園で言うとお絵描き、お遊戯、お歌。なので、国語・算数・理科・社会の前にみんなで歌う、動く、お絵描きするということが人間の一番根本的なものとしてあるんですね。

人間が表現したいこと、それはイコール他者に伝えたい、自分はここにいるんだということを認めてもらいたい。そして、かまってもらいたい、褒めてもらいたい、叱られたら反省して次のアクションのきっかけにしていきたいというところでは、やっぱり人間が成長していく上で一番重要なことだと思います。その「表現」の一番根本的なところにはアート、スポーツという縦割りの領域の名前がついているけれど、もしその縦割りの領域の名前がなかったら、反射的に人間が動いたり、発信したりすることにおいては両方とも近いんだなという感覚があります。

早野理事長　今、日比野先生が人間の根源的なことをお話しされた通り、私もこれまで本能に突き動かされて表現してきました。また、アートとスポーツは別の領域のようでも結構同じようなことがあって、作品を描き上げたりマラソンを走り遂げた感動があるから、自分で自分を褒めてあげたいというナルシシズムもそこにある。そして、「表現する」ということを日比野先生がおっしゃられていたように、自己承認欲求に対する当たり前の反射のようなものが人間にはあるんだろうなと思います。領域的にはスポーツ、アート、ミュージックなどに分かれていますが、人の営みの中での幸せ感とか、満足感、充足感、そういったものがこれらの中にある。大変だけどやって良かったなと思う気持ちの積み重ねが社会を良くしていくことなのかなと思います。

――前回の対談で日比野学長は「人間は誰しも誰かに評価してもらいたい。なので、アートには美術館や展覧会がある」というお話をされていました。他者に見てもらう晴れの舞台と

してのスポーツ、あるいは東京マラソンにはどのような可能性があると考えていますか？

日比野学長　スポーツのズルいところは 1 等賞、2 等賞が万人に分かりやすい形であることだと思っているんです。タイムで競う、得点を競うなど、そこにみんなが熱くなって盛り上がるというのがアートにはない部分。アートって「いや、俺の 1 等賞はこっちだよ」みたいなことになるのですが、一方でそこはアートの特性でもあります。でも、評価するというところで言いますと、例えば東京オリンピックのようなプロが集まって競うものと違って、東京マラソンは 38000 人の中でタイムを競う人もいれば、街を走る・沿道の人たちとコミュニケーションをとることの満足度で走る人もいて、混在しているところがマラソンという競技の、スポーツの中でもほかにはない特別なところなんだなと思います。色々な多様な価値観がひとつのマラソンの中にあるということで言えば、すごくアート寄りなスポーツだなという感覚も受けますし、走る風景が変わるというところでもアート的な感覚があります。一人ひとりが一色、一色になって街を彩る。街がキャンパスで一人ひとりが 38000 色になり、街を走っていく。とてもアート的な要素があるという評価もできるなと思います。

早野理事長　日比野先生の今の話はまるで東京マラソンのロゴをご説明していただいたような思いです（笑）。38000 人の彩りを白いキャンパスに描いて、角度、色、幅など様々なダイバーシティを混在させた、みんなの 38000 ストーリーズがある大会。それが『東京がひとつになる日。』。そのロゴのコンセプトをちゃんと受け取っていただいて、やっぱり芸術家さんの感性って凄いなと。あえて説明したわけでもないのに、ありがとうございます（笑）。

――ここまではどちらかと言えば、ランナー、アーチスト一人ひとりの感情や社会との関わりという観点のお話だったと思いますが、少しスコープを広げて、アートやスポーツが社会や街づくり、あるいは人づくりに関わる可能性についてはどのように考えているのかを教えてください。

早野理事長　冒頭でも少し触れましたように、人は食べて、寝て、暮らしていくだけのオーディナリー（通常）なライフでも生きていけますが、エクストラオーディナリー（特別）な時間、経験、人との触れ合いなど、普段の生活の中にちょっとハイライトが当たる時間というものが絶対に必要だと思っています。私たちはその中のある 1 日を切り取った『東京がひとつになる日。』というイベントを開催しています。でも、普段の生活は皆さんのオーディナリーライフの中にあって、その中で毎日歩いたり走ったり、絵を描いたりと、通常の生活がある。

そういう中で我々はもっと身近に、声を大きく、また行政と一緒に街づくりをやっていくヒ

ントとして、今回のような対談も含めてどんどん話していくべきだと思っています。私も日比野先生のレベルではありませんが、講演会では必ず街づくり、スポーツ、アート、ミュージックの話をしているんですね。皆さんの幸せのための我々の活動でもありますし、芸術、音楽の役割でもありますし、また行政の目指すところでもあると思って、東京都さん、あるいは国ともずっと一緒に話していきたいと思っています。それをもう少し分かりやすい形、言葉として色々なところで話すことによってもっと広めて、「ギリギリ生活できればいいや」よりもちょっとエクストラオーディナリーな部分をつくっていければ幸せなのかなということを、東京マラソン財団として目標としています。

日比野学長　文部科学省の中にスポーツ庁と文化庁があるように、スポーツと文化は人を育てる上ではとても重要なものだと思います。例えば学校の部活では最近、体育の先生が顧問になるのではなく、街の中のスポーツクラブに移行することも奨励されています。ですので、昔のように学校では放課後もみんなと一緒に遊ぶ、休日には地域の人たちと学校の運動場で遊ぶ、PTA も学校の先生も商店街のおじさんたちも一緒になってガチャガチャやっていたという時代の中では、学校教育が社会的なことも教えてくれる役割を果たしていましたが、今はなかなかそういうわけにはいかなくなってきた。学校の中では学力というものを専門的に勉強するけれど、じゃあ社会的な人間の感性や活動はどこで体験していけばいいのだろうかというのは、ちょっと置き去りになっているところがあるかと思うんですよね。そうした時に、地域の中で行われるスポーツ活動とかアートプロジェクトがこれからはとても必要になってくるのだろうなと考えています。

そうなると研究機関である大学だけが芸術やスポーツのことを考えてもダメで、大学に入ってくるその前の高校生、中学生、小学生、園児たちに対して地域の中でどんなスポーツ、文化の環境が提供できるか。それが、これからの教育の上でも、街づくり・社会づくりの中でもとても重要だと思っています。そうした日常の中で行動変容が少しずつ生まれてくると、今起こっている社会的な課題解決の糸口になっていくんだろうなと思っているので、地域の中での活動というものをこれからの仕組みとしてつくっていかなくちゃいけないんだろうなと思っています。

――アートやスポーツをもっと身近なライフスタイルに取り込んでもらうためには、どのようなことをやっていけばいいのでしょうか。

早野理事長　どんな街が幸せなのか、どんなライフスタイルが幸せなのかというのは、スマートウェルネスみたいな便利で効率的な社会であることと、健康かつウェルビーイングとしての必要な幸福感、達成感をつくる芸術や音楽、スポーツがあってこそだと思います。おそらくそれを否定する人はいないだろうとも思っています。ただ、それを統括して推進する

のが文科省なのかどこなのかというのはまた難しい話で、人間庁というものがあるわけではないですから、俯瞰した形での人間の生活をデザインする部署がないというのも事実なんだと思います。

そういう中でどうやってアートやスポーツを身近に広げていくかというのは、今回のような対談で日比野先生がスポーツのことを話したり、我々が芸術や音楽のことを話していくしかないかなと。あるいは我々を支えてくれるパートナー、スポンサーさんと一緒に街づくりをやっていく。だいたいの企業がお持ちのプロダクトやサービスはすべて人間のためにつくっているものですよね。そういう部分では共通点があるので、パートナーさんと一緒につくり上げるというのも一つの方法だと思います。そして東京マラソンというプラットホームを使って、日比野先生のアートの世界、音楽の世界、スポーツの世界を表現する。東京マラソンを使ってお互い相乗りするというのも、身近なライフスタイルに広げていく一つの機会なのかなと思います。

日比野学長　東京マラソンをきっかけにスポーツとアートがコラボして、この芸術未来研究場展の中でも運動と視覚と感性をつなげていくプログラムがたくさんあるんですよ。自分のイメージ通りに体を動かすことも運動というならば、センサーが自分の手の動きを感知するゲームで思い通りに手が動いているか経験できたり、VR ゴーグルで視覚情報と実際の感覚から自分の想像力のスイッチを入れてもらうものなど。あと今、サイエンスラボでやっているのは音楽を聴きながら寝るだけ。寝るのも一つの運動なので、音楽を聴いて寝ながら自分の感覚と運動を融合させる経験などといったものがあります。スポーツと言うとどうしてもアスリートとかオリンピックみたいなものを考えてしまいますが、欲しいものがあったら手が伸びるといった、もっと本能的な人間のアクション、リアクションに着目すれば、アートとスポーツの領域がもっとにじんでいくのかなと思います。

また聴覚障がい者のデフリンピックが 2025 年に東京で開催されます。そこで、ろう者における音楽とは何ぞやという研究も現在しているのですが、聞こえる人たちの文化を「聴文化」、ろう者の文化を「ろう文化」と呼ぶことを僕も初めて知りました。車いすマラソンもそうだと思いますが、色々な文化の中でも障がいというものが逆にどんどん特性になって文化になっていく。あと、口の中の触覚を材料にして表現している作家もいます。視覚、聴覚、手足だけでなく、口の中を自分の情報収集の場として、そこから何か形なり新しい世界観を生み出そうという、口腔宇宙みたいなものを表現している。これらを踏まえると、スポーツというものがいわゆる競技だけじゃなくて、様々な運動が表現になっていきますよね。そうした意味でのスポーツとアートの接続というものは限りなく色々な表現の可能性、新たなスポーツの可能性、社会の作り方を広げていくのだろうなと思っています。

早野理事長　国民体育大会が国民スポーツ大会になるという変化があり、日比野先生がおっしゃるようなただの順位付けのスポーツではなく、国民が本当にスポーツになじむような大会であるべきだということを広げていこうと今、我々も提案しているところです。また、デフリンピックの展示も拝見して、あぁ、アートはこの世界にも関係しているんだなと。我々も運営のお手伝いをさせていただくことになっていますが、デフリンピックという一つのイベントに関しても色々なアプローチがあり、様々な社会的価値観をあらためて感じることが非常に多いと思っています。ですから、これらのことをもっと広めて参加者を増やし、スポーツもアートもやってみるとすごく楽しいんだなということを伝えていくのは一つ、大きな勉強になりました。

――ハードなスポーツである 42.195km のマラソンをアーチストが体験したらどんなアウトプットが出てくるのか。非常に興味を持ったのですが、いかがでしょうか？

日比野学長　僕はマラソンを走ったことはないのですが、究極の体験としては砂漠や北極圏、ジャングルの山の中には行ったことがあります。そういう場所へ行く予定を立てていて、あそこにはもう二度と行かないだろうな、あの体験は二度とできないだろうなと思うと、そこで何かアクションを起こしたい。それで極地に行くのだから荷物を少なくしなくちゃいけないのに、極地に行けば行くほど画材を持っていっちゃうんですよね。そこで自分がどんなアクションを起こすのかを自分で体験して、見てみたい。そうした気持ちが自分の中にはあるので、例えばアーティストがマラソンを走ったとしたら、その究極の境地はその時にしか味わえないから、それを必ずや表現してやろうという気持ちで、絵にするのか、彫刻にするのか、映像にするのか、それぞれのメディアで表現すると思いますよ。完走しようが、途中でリタイヤしようが、その体験を自分の表現にしたいという気持ちになると思いますね。

――早野理事長、東京マラソンでアーチストの方々に出走枠を解放することってできたりするものなのでしょうか？

早野理事長　もちろん、ジャングルに行くのと同じくらい大変だと思いますが（笑）、僕のさっきの話に戻りますと、エクストラオーディナリーな体験をすることは相当な刺激になったり、今まで気が付いていなかった表現にステップアップすることになるかもしれません。その意味では非常に面白いのかなと思います。今回のようなコラボや対談をさせていただく中で実現した試みは我々にとってもプラスになることですので、ぜひご招待さしあげたいと思います。よろしくお願いします。

日比野学長　東京マラソンにアーチスト枠ができるということですか？

早野理事長　作ります！

日比野学長　前回は「ドローイングランナー展」で走っている人をスケッチしましたが、実際に自分が走った体験を表現していくことによって、マラソンは自分にとって何だったんだろうか、スポーツは何なのかということを表現していく。それは面白いですね。でも、やるとしたら予選をやらないといけないですね（笑）。ただ走れるだけじゃなくて、走ったものをどう表現するかまで含めてね。

――そこまで身体性を伴わせた取り組みは大学の教育現場の中ではあるのでしょうか？

日比野学長　それはありますね。僕は昔、日本サッカー協会の仕事をしていたこともありまして、その頃に元日本代表監督の岡田武史さんに藝大で授業をしてもらったんですね。それがフォーメーションの授業でした（笑）。サッカーは何かと単純に言いますと、ボールを運んでゴールに届けるというコミュニケーションの仕事なんです。そしてボールをゴールに届けるということをどうデザインしたらいいのかを考える時にフォーメーションが生まれてくるので、そういう授業を岡田さんと一緒に藝大のグラウンドでやったりしましたね。スポーツとアートの融合の授業は工夫すればいくらでも出てきそうな気がしますね。

早野理事長　なるほど。アーチストの東京マラソン参加ですが、たとえマラソンを完走できなくても脱落した悔しさや怒りを表現するのもアートの一つですから、取り組みとしては面白いと思いますし、ぜひ実現に向けていきたいですね。

日比野学長　じゃあ、その表現を来年の芸術未来研究場展で発表するのもいいですね。

早野理事長　そうですね（笑）。ぜひ日比野先生にはマラソンのパフォーマンスと合わせて評価してください。

日比野学長　では、アートとスポーツが融合した東京マラソンの一つの特徴として、ドローイングランナーの次を育てていきたいと思います。

――次に伺いたかったのは、今後の東京藝大と東京マラソン財団の連携の具体的な内容だったのですが、もう今の話で決まりということでよろしいでしょうか？

早野理事長　さっきも少し触れましたが、マラソンはどうしても身体スポーツだと決めつけられてしまいます。でも、実はすごくエモーショナルで、いろいろな葛藤がある一つのストーリーなんですね。その中にアートの要素や今日お話しさせていただい中で勉強になった

ことを取り入れながら、単に無理やりアートとくっつけたみたいなものではなく、そこまで掘り下げていくんだという取り組みを日比野先生とやっていきたいと思います。

日比野学長　ちょっと思い出したことがあるのですが、建築の計測ってあるじゃないですか。計測器を使ったり、最近だと GPS で測ったりします。でも、建築科のある学生は走っていましたね。街のサイズ感というものを自分が走っている映像で見せていました。そうしたドローイングランナーの要素を持っている学生たちは大学の中にきっとたくさんいると思います。

――まさにそれ自体がアートになりそうですね。東京マラソン財団もそうした企画をたくさん実現できるように頑張っていきたいと思います。では最後に、お二方からそれぞれ今回の対談の感想、または今後の取り組みへの期待などを教えてください。

早野理事長　芸術未来研究場展の展示を見せていただきまして、サステナビリティやデフリンピックなども含めて色々なことにアートという基軸で掛け算されているのだなと勉強になりました。実は我々も似たようなことをやっておりまして、走りながらごみを拾うプロギングというものもやっております。そうした社会に貢献するようなことも含めて、どういう意義を持って東京マラソンをやっていくのかということに関してはかなりの部分で一緒に相乗りできることもありますし、もっと大きな渦になっていけばいいなと考えております。今回のような対談の場でなくても、またどこかで意見交換させていただければと思っております。

日比野学長　コロナを挟んで藝大では部活が縮小してしまったんです。僕も大学時代はサッカー部に入っていたのですが、やっぱりスポーツの持っているコミュニケーション能力はすごく高い。部活の先輩後輩のコミュニケーションや他の大学との交流試合など、スポーツのコミュニケーションから得る社会的な学びというのはとても大きいので、スポーツの持っている力で表現力やコミュニケーションの楽しさを体験できるようなことを大学の中だからこそ実施していきたいですね。また、大学のキャンパスの枠を超えて早野さんと対談できましたので、マラソンをきっかけにして様々なスポーツの魅力あるステークホルダーと関係していけるような、そんな人間力の高い芸術家を生み出せる教育研究機関になればと思っています。どうもありがとうございました。